

へいぞうざわ
平蔵沢ヒバ人工林施業展示林は、現存では東北地方最古とされるヒバの高齢人工林です。岩手県滝沢市の市街地近く、東北森林管理局盛岡森林管理署管轄の影添国有林にあり、盛岡駅からも車で20分ほどでアクセスできる好立地にあります。

ヒバはアスナロの変種であるヒノキアスナロの、東北地方での呼び名です。石川県の能登地方ではアテと呼ばれます。国宝・中尊寺金色堂の主要建材であるなど、耐水性や防腐性に優れる木材となり、青森ヒバとして日本三大美林にも挙げられるヒバは、秋田スギや南部アカマツとともに森林大国の東北地方を特徴づける林業樹種といえるでしょう。なお、現在の東北森林管理局は青森・岩手・宮城・秋田・山形の5県をカバーしていますが、かつては青森宮林局が青森・岩手・宮城の3県を管轄範囲とする時代が長く続きました。ヒバは青森宮林局の看板樹種ともいえる存在で(写真↑)、関連する「我が国初の森林鉄道『津軽森林鉄道』遺構群及び関係資料群」や「坪毛沢ヒバ木製治山堰堤群」も林業遺産となっています。代表的なヒバ自生地としては青森県の下北半島・津軽半島のほか、岩手県の早池峰山、北海道の渡島半島などが挙げられます。耐陰性が高く、実生による更新と



林内の様子。ヒバの大木の間を歩く

日本森林学会による

日本の林業遺産を知ろう！

第27回

へいぞうざわ
平蔵沢ヒバ人工林施業展示林

東京大学大学院農学生命科学研究科附属演習林

とうやま けいすけ
當山 啓介



写真1 ヒバ材を用いた建築例
(青森市森林博物館。旧青森森林局庁舎)



写真2 ギャップ(倒木化などで生じた空間)内では幼樹に陽が当たる



写真3 いわて林業アカデミーの研修光景
(盛岡森林管理署提供)



写真4 駐車場付近からみた平蔵沢の様子

もに伏条更新(雪などで接地した枝が発根し、独立する)が可能でヒバは、主に天然林から木材生産されてきており、現在のヒバ林も天然林が大半です。一方で、江戸時代に下北半島までを治めていた南部藩(盛岡藩)は、津軽藩(弘前藩)と並んでヒバ資源を大いに利用し、藩命以外での伐採禁止措置などを行うとともに植林も推奨していました。南部藩に仕えて平蔵沢に豪壮な館を構えた牧田氏が、スギなどとともにヒバ(注:当時は松と呼んでいました)の苗木を下北半島から取り寄せ、江戸時代末期の天保14(1843)年頃に平蔵沢へ植林したとのこと。後にこの植林地は盗伐対策のためか藩有林とされ、管理は引き続き牧田氏が担ったようです。明治維新後、牧田氏は零落してしまい平蔵沢を離れたとのこと。

すが、ヒバ林は国有林として現在まで引き継がれてきました。平蔵沢のヒバ林は面積0.44haと広くはありませんが、平坦もしくは緩傾斜のヒバ林の間を縫って小川が流れる心地の良い空間です。およそ180年を経た現在も大きく乱れた樹形は少なく、一斉人工林らしさを保っています。後継となるヒバ稚樹・幼樹も下層に多く見られ、一部では幹折れや倒木によって林床がかなり明るくなっている部分もあります(写真2)。

先述のとおりヒバ林業は天然林中心に行われていますが、歴史的に様々な人為的介入を経てきており、この郷土樹種に植林や一斉造林の選択肢があることも重要です。平蔵沢の高齢人工林は替えの利かない先行事例であり、1955(昭和30)年には学術参考林に、1991(平成3)年からは展示林に指定され、盛岡営林署、のちに盛岡森林管理署によって保護されてきました。また、伏条更新を含めてその動態について様々な調査研究も行われてきました。近年の管理方針は積極的な人為介入を行うよりも推移の観察を旨としており、今後さらに天然林的多層・異齡の森林構造に推移していくの注目をされます。他所のヒバ天然林と比較してみるのも面白いでしょう。

天然林、人工林を問わず、非常に優良な森林資源はなかなか人里近くに残っていないものです。アクセス良好かつ林内を歩くにも快適な平蔵沢のヒバ林は、研修や体験授業などを通じてヒバや森林・林業に関する学びの機会を提供し(写真3)、またその環境を楽しむという役割を高度に果たせる林業遺産だといえるでしょう。経済的価値が高いヒバ林は歴史的に活発に収穫されてきた中で、盛岡森林管理署に残っているこの貴重な森は、長い歴史の中で林業の有志が様々な挑戦を行ってきたことの生き証人であるように感じました。

なお、平蔵沢のヒバ林へは、駐車スペースから平坦な道を徒歩数分でアクセスできます(写真4)が、訪れる際にはハチやヘビ、クマにご注意ください。案内を希望される場合や大人数で見学を希望される場合は盛岡森林管理署に事前にご相談ください、とのこと。最後に、盛岡森林管理署の取材協力に感謝いたします。

参考文献

青森営林局「青森のヒバ」(1963)